

【解 答】

胃梅毒

解説：

梅毒は、性感染症の一種で、1943年にMahoneyらがペニシリンによる治療¹⁾に成功して以降激減した。本邦では、花柳病予防法（1928年）、性病予防法（1948年）での対象疾患とされ、1999年からは、感染症法に基づき報告が義務付けられている。

1960年代と1980年代に流行がみられたものの、その後減少傾向となっていた。しかし、近年は再度増加傾向にある。国立感染症研究所の発表によると、年間患者報告者数が2000年代に入ってから1000人以下で推移していたものの、2013年に1000人を超えた。2021年には7983人と過去最高を記録しており、2022年も上半期のみで5000人を超え、感染者が急増している。特に20歳代女性の罹患率が上昇しており、SNS（ソーシャルネットワークサービス）を通じた不特定多数との性交渉も一因と考えられる。

梅毒は、30歳前後に好発する。多彩な皮膚病変が特徴とされるが、消化管にも病変が出現することがある。消化管病変は胃にもっとも多いとされる。胃梅毒の頻度は、梅毒患者の0.1～0.2%²⁾であり、日常診療において遭遇する機会は少ない。胃

梅毒は、スピロヘータ菌血症にともなう第2期に相当し、梅毒罹患3カ月から3年の時期に胃に病変が出現すると考えられている。身体症状は、腹痛、腹部膨満感、食欲不振、嘔気、嘔吐、咽頭痛、筋肉痛、体重減少、早期腹満感などが出現する³⁾。しかし、いずれも非特異的な所見であり、皮膚所見が体表にない場合は初診での診断が困難となる。好発年齢や性行動などの問診から、性感染症の可能性を考慮することが重要である。

胃梅毒の内視鏡所見の特徴は、本症例と同様、胃体下部から幽門にかけてみられる粘膜を主体とする全周性の炎症と軽度の壁硬化所見である。また、粘膜の肥厚やびまん性にみられる多発びらん、浅い潰瘍や結節性病変なども特徴とされる⁴⁾⁵⁾。胃粘膜所見が皮膚所見に似ることもある。しかし、

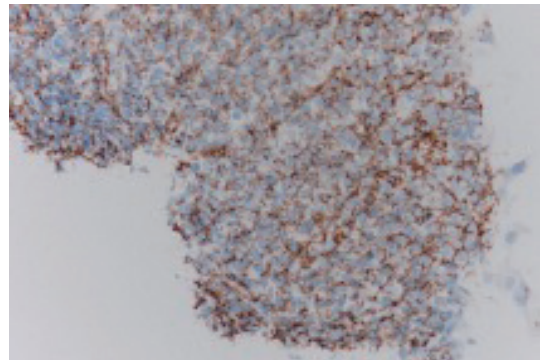


Figure 2. 抗 *T. pallidum* 抗体免疫染色にて染色された多数のスピロヘータを確認できた。

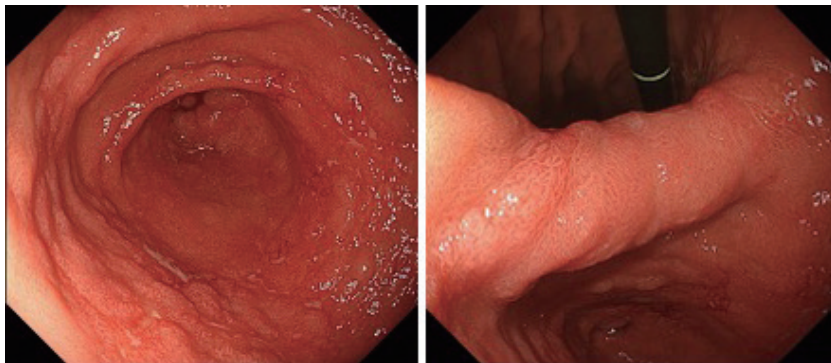


Figure 3. アモキシシリン内服開始6日後の内視鏡画像。粘膜は易出血性で、前庭部～胃角部に広範な不整びらんを認めた。

多彩な粘膜変化は、スキルス胃癌、表層型悪性リンパ腫、acute gastric mucosal lesion (AGML)とも鑑別が必要となり、内視鏡所見のみで確定診断に至ることが困難であることを示唆している。実際Lanら⁵⁾は、胃前庭部の潰瘍に対して胃癌を疑い、造影CTやPET-CTでも胃癌に矛盾しない所見であったものの、胃生検検体に悪性所見はなく、血清学的に梅毒と診断されたのち胃梅毒の診断に至った例を報告している。本症例は、前医で2度の上部消化管内視鏡が行われ、胃癌が疑われた。しかし、生検では確定診断に至らず、当院に紹介となった。当院では、前医の内視鏡所見から通常の上皮性悪性腫瘍ではなく、胃梅毒を含めた他疾患の可能性を考え問診したところ、同性愛者であり、不特定多数との性交渉が明らかになった。さらに数カ月前に急性B型肝炎の罹患歴もあった。当院での生検検体からは梅毒が検出されなかったものの、血清からは、梅毒トレポネーマ抗体とrapid plasma regain (RPR)がともに陽性であった。また、前医から取り寄せた生検検体から抗*T. pallidum*抗体免疫染色で茶色に染色されたスピロヘータが認められた (Figure 2)。

確定診断後、アモキシシリン内服を開始した。内服開始6日後の当院での上部内視鏡所見では、すでに炎症所見の改善が認められた (Figure 3)。

今回、進行胃癌との鑑別を要した胃梅毒の症例を紹介した。希少疾患ではあるものの、梅毒患者の急増にともない、遭遇する機会は一層増えるものと予想される。胃梅毒の正確な診断には、まず

問診および内視鏡所見から梅毒を疑い、病理医と連携して正確な診断を行うことが肝要である。

参考文献：

- 1) Thomas EW: Penicillin treatment of early syphilis. *Am J Med* 5; 687-692: 1948
- 2) Neville DY, John RL: Infections of the Stomach and Duodenum. Haubrich WS, Schaffner F, Berk JE, eds, *Bockus Gastroenterology*, Vol 1, 5th ed, WB Saunders, Philadelphia, 809: 1995
- 3) Winters HA, Notar-Francesco V, Bromberg K, et al: Gastric syphilis: five recent cases and a review of the literature. *Ann Intern Med* 116; 314-319: 1992
- 4) 森本泰隆, 中島智樹, 福田信宏, 他: 胃梅毒に伴う胃潰瘍. *胃と腸* 52; 939-944: 2017
- 5) Lan YM, Yang SW, Dai MG, et al: Gastric syphilis mimicking gastric cancer: A case report. *World J Clin Cases* 9; 7798-7804: 2021

本論文内容に関連する著者の利益相反
：なし

出題：二口 俊樹 (東京慈恵会医科大学
内視鏡医学講座)
炭山 和毅 ()